

あの **人** に会いたい

小児リハの専門家として地域の力になりたい

球磨病院 作業療法士

なかむら ゆうこ
中村祐子さん



「うちの子、落ち着きがなくてすぐ走り回ってしまふのよね」「順番を守ることや集団行動が苦手」「運動や動作がぎこちない気がするんだけど」……。そんな悩みを持つ親もいるかもしれない。

発達面で遅れがある子どもや、病気や障害が原因で運動が難しい子ども、コミュニケーションが苦手な子どもなどに対し、必要な療育を行う『小児リハビリテーション』（以下小児リハ）。人吉球磨で唯一、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の3つの専門職が揃っているのが球磨病院だ。同院の小児リハ室の責任者で、作業療法士の中村さんに話を聞いた。

地域初の常勤の小児作業療法士

中村さんが同院に勤務するようになったのは20年前。当時の人吉球磨には、小児リハの経験がある常勤の作業療法士はゼロ。リハビリを必要とする子どもたちは、松橋町や芦北町の医療施設まで通っていた。そんな状況を重くみた同院が、福岡の病院で小児リハに携わっていた中村さんを責任者に据え、小児リハ室を開設したのだ。

すると、それまでこの地域に埋もれていたニーズが一気に浮かび上がった。リハビリを必要とする親子だけでなく、保育園や小学校の先生などからも相談が相次いだのだ。「現場は切実な課題を抱えている。地域に数少ない専門職として、もっと力にならなければ」。そんな使命感が生まれた。

病院内外で専門性を生かす

病院での勤務に加え、病院の外でも活動の幅を広げている。その一つが、講演活動。保育や教育など子どもに関わる人に向けて、さまざまな特性をもった子どもへのアプローチの仕方などを伝えている。また、子育てひろばなどにも出向き、子どもの発達に関する相談に応じている。

7年前からは、依頼を受け人吉農芸学院（少年院）の少年たちに認知作業トレーニングを実施している。「少年たちの中には、発達障害などの特性をもった人もいる。それが理由でネグレクト（育児放棄）やいじめを受け、行き場を失って非行に走るというケースもあると知った。彼らがもし早い段階から適切な支援や療育を受けることができていれば、結果は違ったかもしれない……。そう思うと、もっと地域の子育て世代に支援の手を伸ばし、早期から発達のケアに取り組みたいと思うようになりました」。

さまざまな特性をもつ子どもとその保護者が支援を受けられる環境が整っていることは、その地域社会にとっても重要なことだ。

地域に数少ない専門家として

小児リハに携わる上で、担当する子どもたちに成長や改善が見られることは大きな喜びだ。しかし当然ながら、すぐに成果が見られない場合や、ときには病気や重い障害をもつ子どもとの悲しい別れが訪れることもある。それでも、「それぞれの子の状況に応じた目標を設定して、一緒に頑張ることができるとリハビリ。『できない』中にも『できる』を見出していく仕事はやりがいがある」と力をこめる。「この仕事は、私にとって天職です」。

宮崎県出身。結婚を機に人吉球磨に移住した。馴染みのない土地だったが、人のよさにずいぶん助けられたという。「私の2人の子どもたちも、近所の方々にずいぶん可愛がってもらった。人吉球磨には、みんな子どもを見守っているという土壌がある。ここで子どもの特性に対する理解が深まれば、ますます素敵な地域になると思うんです」。

「小児リハの専門職が少ない地域だからこそ、私にできることは惜しみなくやりたい。これが、私が人吉球磨に来た意味かもしれないと思って」。



九ちゃんクラブ（人吉市の子育てひろば）での様子



あさぎり町での講演の様子（今年3月）

中村 祐子 さん

1976 年宮崎県日向市生まれ（48 才）。あさぎり町在住。川崎医療福祉大学卒業。医療法人朝日野会球磨病院勤務。作業療法士。小児リハビリテーション担当。子どもの発達支援分野で 20 年以上の臨床経験を有する。